

第3章

『無階級の人々』

(*The Unclassed*, 1884)



George Gissing in 1888
Photograph by G. & J. Hall

作品の梗概

19世紀ロンドンを舞台に、青年男女5人をめぐって繰り広げられる物語である。オズモンド・ウェイマーク (Osmond Waymark) とアイダ・スター (Ida Starr) とモード・エンダビー (Maud Enderby) の3人をめぐる物語と、ジュリアン・カスティ (Julian Casti) とハリエット・スメイルズ (Harriet Smales) とアイダ・スターの3人をめぐる物語が並行し、交差しながら語られる。

作品は、ロンドン北西部の小さな学校で起きた事件から始まる。母親が街の女だと悪口を言われて、アイダは石版で級友ハリエットの頭を殴って怪我をさせて退学になった。モードは仲良しの不在を淋しがる。

アイダは11歳で、母ロティ (Lotty) と二人で暮らしていた。幼い娘は知らなかったが、ロティは街娼をして生計をたてていた。健康を害していて、自分が死んだら、娘はどうなるかと心配していた。ロティは実家の父親ウッドストック (Abraham Woodstock) にアイダを頼む手紙を書く。手紙を届けたアイダにウッドストックは、二度とロティに会わないという条件でならば、アイダを引き取ってもよいとことづてをする。それを聞いたロティは半狂乱になって、病状が悪化して入院する。

ウッドストックは少年時代から困苦にたえて財産をきづき、会計事務所を開いた。一人娘ロティが婚外子を産み、父親をたよって戻ってきたとき、冷たく突き放した。やむなくロティは街娼になってアイダを育てた。苦勞しながらアイダを学校に通わせていたが、入院後数日で病死してしまう。アイダは詳しい事情は知らなかったが、母に冷酷な仕打ちをしたウッドストックを嫌って、彼のもとに行かず独りで生きてゆく。

ハリエットの父は薬屋だが、体の具合が悪かった。父は一人娘のハリエットのことを始終心配している。甥のカスティに自分の死後は娘ハリエットの力になってくれと頼む。カスティは力になると約束する。彼は薬剤師になるつもりだ。

モードは伯母と二人暮らしだ。寒々とした雰囲気の家で、熱烈なクリスチャンの伯母はクリスマスに浮かれ騒ぐのは真のクリスチャンではないと姪

に説教する。

8年後の春のこと、24歳の学校教師ウェイマークは文学好きな友人を求める新聞広告を出す。カスティが広告に応じて、二人は大親友になる。

伯父の死後、カスティは薬屋で働いている。ハリエットは文房具屋に住み込んでいて、病弱なハリエットはカスティと結婚して店を辞めたいと思っている。カスティが病院の薬剤師になると、ハリエットは策略をめぐらして彼を自分の部屋に呼ぶ。二人きりになったところを下宿人に目撃させる。店主に告げ口されてくびになったとカスティに泣きつく。見え透いた欺瞞を疑わないカスティは、ハリエットに同情して彼女と結婚する。我ままで性格が悪く、アルコール依存症のハリエットは悪妻になり、カスティは不幸な生活に苦しむ。

ウェイマークは金儲け主義の学校で、低賃金で酷使されている。校長の妻の出過ぎた振る舞いと息子の悪童ぶりに、教師たちは爆発寸前の不満を抱えている。校長の子供たちを教えに、モードが着任する。若く上品なモードにウェイマークは関心を抱く。

モードは生徒たちの反乱に手を焼く。悪童がモードに帳面を投げつけたので、ウェイマークはたまりかねて体罰を与えた。校長に咎められたウェイマークは辞職する。

仕事から解放されたウェイマークは、翌日モードに出会い、文通したいと申し込む。モードは住み込みの家庭教師になるという。その晩ウェイマークは芝居を見たあと、街娼に声をかけられた。病气らしい女に同情して持ち合わせた金をやった。それを見ていた別の女が感心して話しかけた。その女アイダ・スターとウェイマークは意気投合して、交際が始まった。

二人の女性に出会った翌日、ウェイマークは亡き父の旧友ウッドストックを訪ねて、働き口を頼んだ。ウッドストックの持ち家の家賃集金の仕事ももらった。イーストエンド(East End)の劣悪な住居の貧しい間借り人からの集金だ。ウッドストックのあとについてウェイマークが集金に行って見た貧民街はひどい状況だった。

ひびが入った天井や腐った階段を修理してくれとか、部屋代が高いと住民が不平を言うと、ウッドストックは「部屋が気に入らないのなら、出て行け」と突き放した。部屋代を二週間滞納している家では、女が藁の上に寝て意識不明を装っていた。ウッドストックはウェイマークに手伝わせて、その女を部屋の外に放り出した。女の娘が腹を立てて窓ガラスをたたき割ると、その

娘も投げ出して、部屋に鍵をかけてしまった。

ウッドストックはウェイマークを気に入って、誕生日に50ポンドの値打ちがある、ホガース (William Hogarth) の版画集をプレゼントしてくれた。ウッドストックに政治家にならないかと聞かれ、ウェイマークは自分は小説を書くのだと言う。

ウェイマークはアイダと交際するうちに、だんだん彼女に惹きつけられた。モードへの関心は薄れたが手紙を書くと、長い返事が来た。伯母の影響を強く受けた考え方を披瀝していた。

アイダから郊外へ散策に行こうという誘いの手紙が来た。船でパットニーまで行き、そこからリッチモンドまで歩こうというのだ。当日は天気恵まれて、すばらしい一日になった。昼間会ったアイダはますます魅力的だった。

アイダがヘイスティングズ (Hastings) へ避暑に出かけると聞いて、ウェイマークも行くことにする。ヘイスティングズの浜辺で、ウェイマークはアイダから11歳で母に死なれてからの苛酷な人生を聞く。

ひとりぼっちのアイダは自活するために食堂に住み込んだが、酷使されただけでなくセクハラもあったので逃げ出した。物乞いしてもらった小銭でパンを買って、ドアが開け放してある家の階段で寝た。親切な女性の家で女中に雇ってもらったが、その女性が死ぬと、また仕事探しに苦労した。洗濯屋で働いたが、もっとまじな仕事がしたくて小間使いになった。しかし、小間使いの仕事もつらかった。その家の息子に誘惑されて捨てられ、ついに街の女になったという。

ウェイマークは、苦労を重ねても美しいアイダにますます惹きつけられる。しかし、アイダは突然帰京して所在不明になってしまった。

一方、牧師だったモードの父は、浪費家の妻のために公金を使い込んで長い間失踪していたが、久しぶりに戻ってきた。精神疾患が癒えた母と、親子3人の生活が始まるが、派手な生活に、モードはなじめない。

アイダが所在不明になったあと、ウェイマークは偶然モードに再会して交際が始まる。エンダビー家にはウェイマークが憧れていた上の階級の優雅な雰囲気がある。

半年ぶりにアイダからウェイマークに会いたいという手紙が来た。モードと交際しているウェイマークは迷うが会いに行く。アイダは洗濯屋で働いて、以前よりもずっと質素に暮らしていた。

不幸な結婚生活に苦しむカスティは、ウェイマークに悩みを打ち明ける。ハリエットが悪友と手を切るには良い友だちをもつことだと、ウェイマークはアイダを推薦する。アイダが訪問すると、昔殴られた傷痕が今も残っているハリエットは恨みを忘れず、彼女をおとしめようとする。夫カスティが美しいアイダに惹きつけられているのも癪にさわる。アイダが街娼をしていたことを突き止め、勤め先に知らせる。過去が暴露されて、アイダは解雇される。さらにハリエットはアイダがブローチを盗んだと警察に告発する。濡れ衣をさせられて、アイダは留置される。妻の嘘を見抜いたカスティは憤慨するが、ハリエットは夫とアイダの仲を邪推する。結局、アイダは6ヶ月の刑を宣告された。

モードは母の派手な生き方を嫌悪するようになる。ある晩、ウェイマークが集金しているイーストエンドに行き、取っ組み合いの喧嘩をしている母娘を見て、恐ろしさのあまり失神してウェイマークに助けられた。

モードはウェイマークに自分の生い立ちを語る。伯母から強い影響を受けて育ち、世の中は悪であり、世の中から離れて生きれば悪から解放されると教えられた。いかに生きるべきか思い悩むモードに同情したウェイマークは、彼女に求婚し、承諾をえた。

アイダが刑期を終えて出所する火曜日に彼女を出迎えると、ウェイマークは知らせておいた。しかし、月曜日に集金にまわったとき、ウェイマークは店子に捕まって金を奪われ監禁された。真っ暗闇の部屋で絶体絶命の状況に陥ったウェイマークは、自分が本当に愛しているのはアイダであることを悟る。

ウッドストックたちはウェイマークが行方不明になったことを心配する。イーストエンドで意識不明の彼を見つけて助け出した。アイダは祖父ウッドストックと一緒に暮らすようになった。ウェイマークはアイダに、自分がモードと婚約していることをなかなか告白できない。

モードはますます孤独な生活を送っていた。父は不在勝ちで、母は火遊びをしていた。ウェイマークとも打ち解けられないモードは、住み込み家庭教師になる。しかし、父が仕事の不始末で警察に追われて失踪し、動転したモードと母を支えるために、ウェイマークは奔走する。

ウッドストックはアイダの影響でスラムの住宅を改良しようと視察に行つて、天然痘に感染して死ぬ。アイダは祖父の遺産を相続して、早速スラムの住宅改良に取り組む。ウェイマークも、ウッドストックから遺産を貰って仕事の苦役から解放される。ウェイマークは久しぶりにアイダを訪ねてモード

第3章 『無階級の人々』

との婚約を打ち明けた。二人は愛し合っていたが、モードとの婚約を破棄するわけにいかないと、潔く別れた。

ウェイマークとモードの結婚式前夜、モードの父が警察に逮捕された。母は錯乱して自殺した。モードはショックで病床につき、婚約解消を申し出た。ウェイマークは半年後も同じ気持ならば解消しようとした。

地獄のような結婚生活の中で、カステイは結核にかかり咯血した。結局、ハリエットとは別居した。カステイは保養先で死に、ハリエットは事故死した。半年後、ウェイマークはモードの伯母から姪の決意は変わらない、姪と二人で修道女会に参加するという手紙をもらった。ウェイマークはアイダに自由の身になったことを知らせた。

不幸を見据える

第1節 時代の基調音を描く

題名の“The Unclassed”という言葉について、ギッシングは1895年版の序文でその意味を解説した。これは「落ちこぼれ」「déclassé」という否定的な意味ではないし、小説中でヒロインが陥った不幸な状況でもない。「階級をはなれる」ことだ。「階級をはなれる」ことは、人間が、社会の既成の階級には属さず、いわば階級を否定し、階級を超越した時点で真の人間になるという積極的意味だという。

この時期、大英帝国の繁栄の裏側で、貧困や差別で苦しむ人々の存在が世間の注目を集めていた。恵まれた側の社会と、恵まれない側の社会との乖離は大きく、ディズレーリ (Benjamin Disraeli, 1804-81) がいうように、まるで2つの異なる国民のようであった。イギリスはピラミッド型の階級社会といわれる。国王を頂点とする富裕な上流階級、産業革命の進展とともに増大した中流階級、圧倒的多数を占める労働者階級からなっている。19世紀末にロンドンでおこなわれた調査では、中流以上の世帯は2割にみたく、イギリス全体でも圧倒的多数は労働者階級に属していた。¹

労働者や女性たちは非常に苛酷な生活を強いられていた。そのような社会的弱者の状況を改善しようとする運動がこのころ盛んになりつつあった。世の中の仕組みは絶対に変えられないものではないと、理想を抱いて活動する人々がいた。こういう時代思潮の中で成長したギッシングも、恵まれない人々の側に立って、その実情を明らかにして正義を求めようとした。

主人公オズモンド・ウェイマークやジュリアン・カスティのような、低い階級の貧しい境遇にあって、教育を受けて目覚め、世の中の不条理な状況の中で苦しむ若者をギッシングは繰り返し描いている。彼らは現実の社会が明らかに間違っていると思うけれども、その中でもがき苦しみながら生き続けなければならない。彼らは生まれついた階級に満足することはできないが、上の階級を無批判に受け入れる気はない。人間を差別する階級を否定して、

第3章 『無階級の人々』

階級差によって束縛されない自由な社会を望んでいる。

階級差別によって自分の夢をかなえられない青年は19世紀末のイギリス小説にしばしば登場する。たとえば、トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) の『日陰者ジュード』(Jude the Obscure, 1895) の主人公も同様な青年である。ちなみに、ハーディは、『無階級の人々』を高く評価した。²

ギッシングは、ロンドンの貧しい労働者階級の人々の生活を中心に描き始めた。彼自身生活に困って、ロンドンの貧民街で暮らした経験があった。途方もなく貧しい生活をしながらも夢を抱いて生きる人々、生存するためにどんなこともする人々など、実際の体験や観察にもとづく描写が作品にちりばめられている。

カスティが新聞広告に応じてウェイマークと親友になる挿話があるが、これはギッシング自身が、1878年の暮れにベルツ (Eduard Bertz) が出した新聞広告に応じて、彼と生涯の友人になった事実にもとづいている (Korg 23)。カスティは貧しい生活の中でギボン (Edward Gibbon, 1737-94) の『ローマ帝国衰亡史』(The Decline and Fall of the Roman Empire, 1776-88) を愛読し、いつの日かローマを訪れることを夢見るが、これは作家自身が抱いた夢であった。現実の惨めな生活に押しつぶされることなく生きようとする姿勢が描かれている。

『無階級の人々』の主人公ウェイマークはカスティに、この時代の基調音は不幸だと語る。

“Art, nowadays, must be the mouthpiece of misery, for misery is the key-note of modern life.” (165)

また次のように、抱負と芸術家の使命を語る。

“I will write a novel such as no one has yet ventured to write, at all events in England [. . .]. We must dig deeper, get to untouched social strata.” (116)

“For the artist ought to be able to make material of his own sufferings, even while the suffering is at its height. To what other end does he suffer? In very deed, he is the only man whose misery finds justification in apparent results.” (212)

『無階級の人々』には、この時代に人々の不幸の源になったさまざまな要因が浮き彫りにされている。

このような、社会の片隅の人々の苦境を描き、正義を求めようとする姿勢

は、ギッシングの人生経験と無縁ではない。若いときの苦い体験が彼のその後の生き方を決めたのである。

ギッシングは幼いときから読書が好きで、熱心に勉強した。将来は研究者になることを目指していた。マンチェスターのオーエンズ・カレッジ (Owens College) でも優秀な学生だった。数々の賞もかちえている。しかし、窃盗を犯し逮捕されたために、賞はすべて取り消されて、放校されてしまった。窃盗を犯した理由は、売春婦ヘレン (Marianne Helen Harrison) を更生させる資金をえたかったからである。

ギッシングは独り暮らしの淋しさからヘレンと親しみ恋に落ちた。彼はヘレンを社会の犠牲者だとみなした。不運にも下層の階級に生まれると、うら若い女性が生きるために売春をしなければならない。一方で、富裕な階級に生まれれば、何一つ不自由のない生活ができる。そういう不公平な現実に対する抗議として、ギッシングは窃盗という行為に走った。富裕な階級の子弟がカレッジの控え室に無造作に放置した金品を盗んでも、持ち主はそれほど困ることはあるまい。一方、売春婦ヘレンの更生にその金はおおいに役立つと考えたのだろう。若いギッシングは、世の中の法律を破ることの重大さを十分認識していなかった。その結果、自分の人生にどれほど大きな影響が及ぼされるか分からなかった。

ハルペリンが言うように、この窃盗事件について考えることが、ギッシングの人生と作品を理解する上できわめて重要である (Halperin 11-12)。この事件が、作家ギッシング誕生のきっかけになったのである。

ヘレンのために窃盗を犯し逮捕された事件は、ギッシングの心に終生消えない傷痕を残した。彼の人生設計はがらりと変わった。研究者になる夢は捨てなければならなかった。以後、苦しい生活を送り、生活費を稼ぐために心を悩ませなければならなくなった。そしてギッシングは貧困と犯罪について考え続けた。作品の中にも、貧困が人間に及ぼす影響をさまざまな形で描いている。

出獄後アメリカに約1年滞在して文章修業をつんだギッシングは、帰国後、ロンドンの貧民街に住んで困苦窮乏の生活をしながら、小説を書いた。1878年7月に小説を書き上げたが出版できなかった。またすぐに創作をはじめ翌年完成した。これを『暁の労働者たち』として出版した。1878年秋、ヘレンと同棲を始め翌年10月27日に正式に結婚した。法律を破っても更生させようとしたヘレンを見捨てるわけにはいかなかった。彼はヘレンの側、つまり

貧困で苦しむ人の側に立って、その状況を記録し、その人々のために証言しようとして決意した。

ギッシングはマンチェスターのオーエンズ・カレッジを放校されるまでは、中流階級の生活を送っていた。ロンドンの貧民街で暮らすようになって初めて、下層の労働者階級の現実を知ったのである。労働者階級に生まれ育って、その状況に慣れきった目ではなく、中流階級出身の青年の目に映った労働者階級のどん底生活の実態が、初期の作品には溢れるように描かれている。

ギッシングがどん底の世界で見たものは、想像を絶する貧しさであり、隠蔽することのない不幸な生活だった。上の階級であれば、他人の目から隠すような私事も、どん底では隠せない。見せ掛け、虚飾に隠れることのない人間の生き様を、ギッシングは徹底して見据え、記録した。

1883年末に『無階級の人々』を完成すると、チャップマン・アンド・ホール社(Chapman and Hall)に送った。チャップマン・アンド・ホール社のリーダーは作品を評価したが、細部を何箇所かと、特に最終巻を大きく書き直すことを求めた(Korg 62)。最初ギッシングはリーダーの正体を知らなかったが、的確な助言に舌をまいた。ジョージ・メレディス(George Meredith, 1828-1909)であることが分かると改めて感服した。『無階級の人々』は1884年に出版された。

第2節 女性の窮境と不幸な結婚

ギッシングは苦しい状況の中で生きている女性たちを繰り返し描いた。『無階級の人々』にも印象的な女性たちが登場する。

『無階級の人々』は、ロンドンの小さな学校で、アイダ・スターが級友ハリエット・スミルズに母が街の女だと言われたので石板で殴って、怪我をさせた場面から始まる。アイダは放校されるが、彼女と親しいモード・エンダビーはその不在をさびしがる。この3人の女性がその後どのように生きるかを描いて、ギッシングは当時の社会のさまざまな問題を浮き彫りにした。

まず女主人公アイダがどのように苦境を生きたかを見よう。

アイダの母(ロティ)は、父親(ウッドストック)の反対を押し切って行動して、婚外子を産んだ。男に捨てられて、実家の父親をたよるが突き放された。ほかにたよる者はなかったので、やむなく売春婦になった。売春をしながら娘を育てたが、身体をこわして死んでしまう。

アイダの母のように、この頃の下層の女性たちは婚外子を産んだりして、親族から見放され世間から排斥されると、餓死するか、売春するかの選択を迫られていた。19世紀中頃フロラ・トリスタン (Flora Tristan) は『ロンドン散策』(*Premenades dans Londres*, 1840)の中で、「ロンドンの売春婦といえ、いつでも、どこでも、姿が見られるくらいに大勢いる」という。³彼女たちは生存するためにやむなく売春婦になったが、苛酷な生活の中で身体をこわして数年内に、半数が悪性の病気に感染したり肺炎になって死んでしまう。7、8年続けられる者はごく僅かであった。ロンドンに売春婦は10万人ほどいたが、その半数は20歳以下の少女だという。ヒバート (Christopher Hibbert) は、1860年代のロンドンにはプロの売春婦は8万人いたという。⁴アイダの母もこういう女性の一人だった。

母が死んだあと、よるべのないアイダは生きるために大変な苦勞を重ねた。小さな店の下働きになったが、あまりのつらさに耐え切れず当てもなく家を出た。宿賃はなく、開け放した戸口からこっそり忍び込んだ他家の玄関先で寝たりしながら、はんば仕事で飢えをみたした。たまたま親切な女性に召使の仕事をもらい数年が過ぎたが、親切な主人が死ぬと、また苦難の日々が続いた。洗濯屋で半年ほど働いてから、小間使いの仕事に就いたが酷使されたあげく、主人の息子の誘惑にのって愛人になった。やがて捨てられて、街の女になった。

アイダはウェイマークを愛するようになると、売春をやめて洗濯屋で働くことにした。肉体的にかなりつらい仕事で報酬は少なかったが、ウェイマークへの愛にふさわしい女性になりたかった。

ウェイマークはアイダに言う。

“My ideal woman is the one who, knowing every darkest secret of life, keeps yet a pure mind—as you do, Ida.” (131)

アイダはその理想を体現した女性である。これはまた、ギッシングが現実の生活の中でヘレンに託した理想だったろう。売春婦アイダはウェイマークから本を借りて熱心に読む。「どうしてか分からないけど」と彼女は言う。「近頃本を読みたくてたまらないの」(110)彼女が熱心にページをめくっていたのは『ジェイン・エア』である。つらい生活の中でくじけずに頑張るジェインの姿をアイダに反映させている印象がある。

アイダは以前売春婦だったことを密告されて洗濯屋を解雇される。さらに

窃盗の嫌疑をかけられて逮捕される。一度泥沼に落ちこんだ者に対して社会の目はきわめて厳しい。実は冤罪だったのだが、窃盗罪をきせられて服役したアイダは、出所後、金持ちの祖父ウッドストックと一緒に暮らすようになる。昔の苦労を忘れないアイダは、祖父の持ち家がある貧民街の住宅改良や、貧しい子供たちの福祉に力をつくす。

祖父に泥沼から救い上げられたアイダのような例は、現実の社会ではごく稀なことだった。いったん泥沼に落ちた女性は数年で身体をこわして死ぬことが多かった。

アイダの級友たちも苦しい生活を送っていた。モードは父が失踪し、母が病気だったから、自活しなければならぬ境遇だった。当時、女性の仕事として世間的に体裁が悪くないと認められた教師になったが、それは現在とは違って、非常に不安定な仕事だった。雇い主の一存でいつでも解雇された。モードは生徒たちに反抗され、まともに授業ができず解雇された。

ハリエットは、母が早死にしたあと、父も死んでしまったので店員になった。しかし、もともと健康がすぐれないハリエットにとって仕事はつらかった。何とかして結婚相手を捕まえて、安定した生活を手に入れようとした。

病身のハリエットは策略をめぐらして、従兄カスティと結婚した。そして二人とも不幸な日々を送ることになった。

女性が独力で自活することはきわめて困難なこの時代、ハリエットのように、生活安定のために結婚しようとする女性は多かった。19世紀の小説には結婚相手を何とかして捕まえようとする女性がたくさん登場する。19世紀後半には経済的安定のために結婚した結果、不幸な生活に陥った女性たちを描く小説を、ジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) やトマス・ハーディなどが次々と発表した。女性だけでなく男性も不幸になることを、ギッシングはまざまざと描いた。

ハリエットはギッシングの妻ヘレンを連想させる。カスティの苦しみはギッシングの実体験を表すものだろう。妻を更生させようとギッシングは願ったが、うまくいかなかった。二人の生活は不幸なものだった。ヘレンはアルコール依存症になっていて、酒癖が悪かった。酒代がなくなると以前のように街に出ることもあった。泥酔して騒ぎをおこす妻に耐えられず、ギッシングは1882年に別居した。『無階級の人々』はこういう悲惨な結婚生活の中で書き続けられた。

ハリエットもヘレンも、つらい暮らしの中でアルコールに逃避しないでは

いられないのだ。ギッシングは後の作品『余計者の女たち』でもアルコール依存症の女性を描いている。

カスティとハリエットの結婚生活は不幸なものだった。カスティは親友のウェイマークに苦しみを打ち明ける。

“She wantonly does things which she knows will cause me endless misery. Her companions are gross and depraved people, who constantly drag her lower and lower, to their own level [. . .]. Only this morning there was a terrible scene; she maddened me past endurance by her wretched calumnies—accusing me of I know not what disgraceful secrets—and when words burst from me involuntarily, she fell into hysterics, and shrieked till all the people in the house ran up in alarm [. . .]. Her accusations are atrocious, such as could only come from a grossly impure mind, or at the suggestion of vile creatures.” (163–64)

いったいどうしたらいいかと訴えたカスティに、ウェイマークは彼女を忘れて創作にうち込めと答える。その言葉に、カスティは言う。

“But,” broke in Julian, “this amounts to a sentence of death! [. . .] Work, forget myself, forget her,—that is just what I cannot do! [. . .] I feel my own weakness, as I never could before. When you bid me strengthen myself, you tell me to alter my character. The resolution needed to preserve the better part of my nature through such a life as this, will never be within my reach [. . .]. I shall lose all self control, and become as selfish and heedless as she is.” (164–65)

良い友人を持てば、その影響でハリエットがましな人間になるかもしれないと、ウェイマークはアイダを推薦する。ウェイマークに頼まれて、アイダはハリエットの家を訪れるようになる。幼いころ殴られて、醜い傷跡が残ったハリエットはアイダを憎んでいた。また、夫がアイダに魅了されていることに嫉妬した。

何とかしてアイダを陥れようと、ハリエットは策略をめぐらした。仲間アイダが売春婦だったことを密告させて失職させた。さらにアイダに窃盗の濡れ衣をきせた。妻の所業を推察したカスティは妻を嫌悪し、くっつかかる妻に暴行を加えかねないと、ウェイマークに告白する。

“How am I ever to live with her again? I dare not! I should kill her in some moment of madness!” (196)

カスティにとって妻との生活は地獄のようだった。妻はほとんど毎晩夜ふけまで帰宅しなかった。真夜中に酔っ払って帰り、夫をののしった。家をとびだしたカスティは一晩中通りをさまよったこともある。妻と顔を合わせて毒舌を浴びせられる地獄にくらべれば、そのほうがましだった。

カスティが重症の結核であることを知ったウェイマークは、彼を説得して妻と別居させ、ワイト島へ保養に連れていった。カスティはワイト島で死に、ハリエットは仲間と喧嘩したあげく事故死した。

『暁の労働者たち』にも、ハリエットのような女性キャリー (Carrie Mitchell) が登場する。婚外子を産んだために親族から見放されて野垂れ死に寸前のキャリーに同情したアーサー (Arthur Golding) は、彼女と結婚する。アーサーはキャリーを教育して上の階級の話し方を教えようとする。理想の女性に仕立てようとするが、キャリーにとって、それは無理な注文だった。アーサーが勤める勉強は難しすぎた。キャリーはミュージックホールで遊ぶほうが好きなのだ。二人の生活は悲惨なものとなる。キャリーは借金をして酒を飲み、嘘をつき、大喧嘩をした。やがて愛人とよりをもどして出奔してしまう。アーサーはショックで自殺を考えるが、友人に助けられる。

生活の安定を第一の目的にした結果の不幸な結婚によって、夫も妻も地獄のような生活を送ることを、ギッシングは繰り返し描く。

第3節 ゆらぐキリスト教信仰

先に見たように、アイダとハリエットはそれぞれ苦しい状況で生きていたが、モードもまた、孤独な状況で苦しんでいた。

18世紀から19世紀にかけては科学が大いに進歩した。メアリー・シェリー (Mary Shelley, 1797-1851) の『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein, or the Modern Prometheus*, 1818) に見られるように、生命の神秘を探求しようとする科学者たちもでてきた。聖書の記述に懐疑を抱く人々もでてきた。1859年にダーウィン (Charles Darwin, 1809-82) が発表した『種の起源』 (*On the Origin of Species*, 1859) はそうした傾向をさらに強めた。

19世紀、英国国教会の牧師はジェントルマンの職業として裕福な家の子弟が職に就くことが多かった。就職には縁故関係が重要であった。教区牧師は教区民の道徳的指導者だったが、その職務をはたさない者もいることを小説家たちは描いてきた。1851年の宗教調査によれば、宗教調査の日に英国国教

会ないし非国教会に礼拝に出かけた人は、工業都市部では、10人に対して一人にも満たなかった。⁵ 変革する社会の中で、教会の牧師に代わる道徳的指導者をどこに見出すかということは、真剣に考えるべき問題であった。

モード・エンダビーの父ポール (Paul) は教区牧師だったが、浪費家の妻エミリー (Emily) のために公金を横領したあげく失踪する。妻エミリー、つまりモードの母は悲嘆のあまり自殺をはかった。生命はとりとめたが、精神に異常をきたして入院する。娘モードは母の姉バイグレーヴ (Bygrave) に引き取られる。バイグレーヴは熱心なキリスト教徒で、浮かれ騒ぐことを罪悪だと考え、クリスマスも暖炉に火をいれずパンとミルクだけの禁欲的な生活をしている。モードは伯母のもとで成長するが、17歳になると自活するように言われ、教師になって苦労を重ねる。

父が10年振りに帰国して母と暮らしはじめる。モードを引き取って、親子3人で暮らす。モードは華やかな社交生活になじめない。父は危ない投機かなにかをやっている、母は派手な火遊びをしているらしい。きまじめなモードは生きる指針が見つからず、宗教にすがる。父が逮捕され母が自殺し、婚約者をたよれないモードは、結局、修道女会に参加する。

モードのように、人間としていかに生きるべきかをまじめに模索し苦悩する女性は、ギッシングの作品にしばしば登場する。

『暁の労働者たち』のヘレン・ノーマン (Helen Norman) も牧師の娘だったが、父の死後、いかに生きるべきかを模索した。シュトラウス (David Friedrich Strauss, 1808-74)、コント (Auguste Comte, 1798-1857)、シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) を熟読して、既成のキリスト教とは相容れない考えを持つにいたった。彼女は人類教 (Religion of Humanity) に共感し、貧しい人々のために奉仕する生活を実践する。人類教はコントが始めた宗教である。コントは1849年にパリに教会を設立した。社会学者ビアトリス・ウェッブ (Beatrice Webb, 1858-1943) によれば、人類教は19世紀後半の時代精神をつかんでいる。この頃、他者への奉仕、最終的には人類全体への奉仕が人々の道徳的目標になってきたという。⁶

19世紀後半に人類教はロンドンで発展した。主要な指導者の一人はフレデリック・ハリソン (Frederick Harrison) である。『暁の労働者たち』をハリソンが評価した一因は、コールグも指摘するように (Korg 5)、この点にあるだろう。この頃、ジョージ・エリオットやトマス・ハーディなど、多くの文学者たちがコントに関心を抱いた。ギッシングも、人類教に共感したと考えられる。

第3章 『無階級の人々』

ヘレンの精神的成長にかかわる読書歴はジョージ・エリオットを連想させる。ジョージ・エリオットはシュトラウスの『イエスの生涯』(*Das Leben Jesu*, 1835-36)を1846年に翻訳し、コントの思想にも深い関心を寄せた。19世紀には、人生をどのように生きるべきかを考える小説がつつぎと発表された。人生の指針として、そのような小説を読む読者も多かった。

第4節 スラムの実態

英国は世界の工業国になった結果、都市に人口が密集し、下層の人々は劣悪な環境に住むようになった。貧しさは労働者階級の生活に深く根を下ろしていた。1890年代にチャールズ・ブース(Charles Booth)が推定した数によれば全人口の約3分の1が貧困に甘んじていたという。⁷ フロラ・トリスタンは貧民街を探索して「臭気が強くて今にも窒息しそうな気がした」と書いている。⁸

19世紀ロンドンには鉄道が敷設され、立派な公共施設がつつぎと建設されたが、貧民の住居はなおざりにされた。劣悪な環境の狭い住居に大勢の人々がひしめいていた。19世紀後半には、このような貧民たちの状況を改善しようとする動きが高まってくる。当時、イーストエンドは1879年以來の不況で、失業者が溢れていた。そのひどい状況に、上の階級の人々も関心を寄せるようになった。⁹

労働者階級用の住居建設のために、労働者階級生活改善協会や住宅改良会社などが住宅を建設したが十分とはいえなかった。ジョージ・ピーボディ(George Peabody, 1795-1869)やオクテイヴィア・ヒル(Octavia Hill, 1838-1912)なども、貧民街の住宅改良に取り組んだ。ヒルはこのような住宅改良活動家の中でも最も有名だが、若いころから貧しい人々とともに仕事をし、彼らのあまりにひどい状況を傍観できなかったのだ。¹⁰

『無階級の人々』にも、貧民街の実態がなまなましく描かれている。

ウェイマークが家賃集金人として訪れたエルム・コート(Elm Court)は次のように描かれる。

The paving was in evil repair, forming here and there considerable pools of water, the stench and the colour whereof led to the supposition that the inhabitants facilitated domestic operations by emptying casual vessels out of the windows [. . .]. The Court was a *cul de sac*, and at the far end stood a receptacle for ashes, the odour from which was intolerable. (98)

ウェイマークは集金の先々で悲惨な光景を目にする。ある部屋では、たちこめた水蒸気のために、はじめは何も見えなかった。

The room was hung with reeking clothes from wall to wall. For a time, it was difficult to distinguish objects through the steam, and Waymark, making his way in, stumbled and almost fell over an open box. From the box at once proceeded a miserable little wail, broken by as terrible a cough as a child could be afflicted with; and Waymark then perceived that the box was being used as a cradle, in which lay a baby gasping in the agonies of some throat disease, whilst drops from the wet clothing trickled on to its face. (99)

最上階の部屋を見ると家具はほとんど無かった。片隅に敷いた藁の上に横になった女が震えながら口から泡をふいていた。家賃が払えないので仮病をつかっているらしかった。

アイダは祖父と暮らすようになって豊かな生活ができるようになったが、貧しい人々のことを忘れなかった。スラムの子供たちを郊外の自宅に連れてきてガーデン・パーティを開く。子供たちは生まれてはじめての経験を楽しんだ。

孫アイダの影響で、やっと貧民街の住宅を改良しようと、ウッドストックが下検分に出かけたときの光景描写はすさまじい。

In the room at the top they came upon a miserable spectacle. On something which, for want of another name, was probably called a bed, there lay a woman either already dead or in a state of coma, and on the floor sat two very young children, amusing themselves with a dead kitten, their only toy. (278-79)

その女は顔のあちこちに発疹がでていて、天然痘らしかった。階下からものすごい臭気がたちのぼってきたので、ウッドストックたちは降りていった。

In absolute darkness they descended steps which were covered with a sort of slime, and then, by striking a light, found themselves in front of a closed door [. . .]. Groping about in the stifling atmosphere, they discovered in one corner a mass of indescribable matter, from which arose, seemingly, the worst of effluvia [. . .]. There lay the body of a dead child, all but naked, upon a piece of sacking. (279-80)

ウッドストックは天然痘に感染して死んでしまう。ウェイマークは「スラムの復讐だ」(281)とつぶやく。貧しい人々の問題は他人事ではなく、上の階級の人々もふくめて、社会全体の問題であるという考え方を示唆する言葉である。

『暁の労働者たち』の冒頭はロンドンの貧民街の描写から始まる。そのひどい状況にショックを受けたノーマンは「こんな恐ろしい光景を見ると、神の存在を疑うのも無理はないと思う」と言う。ノーマンの娘ヘレンは、父の死後、貧しい人々のためにつくし、社会改良に尽力しようと決意する。彼女は下層の人々の不幸な状態は、上の階級の人々の無関心と残酷な抑圧に由来すると考える。

貧困の原因には社会が解決すべきものがあるという考えが広まって、社会改革運動がひろがり、20世紀はじめにかけて住居環境の改善、労働条件の改善、初等教育の促進、老齢年金法、国民保険法の制定などさまざまな改革をうみだすことになった。

第5節 現実と夢の対照

これまで見たように、ギッシングは19世紀末の社会のひずみを見据え、克明に描写してきた。『無階級の人々』と『暁の労働者たち』とは、貧民街や不幸な結婚生活の描写など、いくつも共通するところがある。しかし、作品の終わり方では大きな相違がある。

『暁の労働者たち』では、アーサーの悪妻キャリーは別居生活をするうちに入院した。おそらく病死すると思われる。理想の女性ヘレンは結核のために早逝した。世をはかなんだアーサーは滝に身を投げて死ぬという、救いのない結末である。

『無階級の人々』では、中心人物ウェイマークとカスティは作者ギッシングの分身であり、アイダとハリエットは、ギッシングの妻ヘレンの分身であって、2組の物語は、ギッシングが実際に体験した苛酷な現実と、その中でギッシングが抱いた夢を並行して描いたものと思われる。カスティとハリエットの不幸な結婚生活は、ギッシングとヘレンの不幸な結婚生活を反映するものである。アイダは、ギッシングがヘレンに託した夢を具現した存在であって、ウェイマークがウッドストックから遺産をもらって苦役から解放されるのも、ギッシングの夢を実現したものといえる。『無階級の人々』の終わり方

は、現実と夢を対照している。

貧しいカスティとハリエットの早すぎる死はいわば当時の庶民の現実であった。19世紀の人々の平均寿命は今日よりもずっと短かった。1840年の調査では、金がある紳士たちの平均寿命は45歳で、貧しい労働者たちの平均寿命は16歳だった。¹¹ 当時、結核は不治の病だったし、酒浸りになって身をほろぼすことも多かった。

一方、アイダのように、街娼に身を落とし泥沼に落ちてから這い上がることは現実にはきわめて稀なことであったし、ウェイマークのように、他人からの遺産贈与で労働から解放されることもいわば夢物語であった。

しかし、あまりにも暗い現実のどん底の暮らしの中で生きる者にとって、夢を抱いて生きていくことは必要である。短い年月ではとても実現できるとは考えられなかった状況、労働者たちの住居改善や余暇の海外旅行などが、何十年かのちには十分とは言えないまでもある程度は現実となったという歴史的事実を思うとき、このような夢を抱くことはむしろ大切である。ウッドストックの遺産を相続したアイダが自由な生活を手に入れて貧民街の住宅改良に尽力したということは、富の有意義な分配と見ることもできる。アイダの活動は、オクテイヴィア・ヒルの貧民街での住宅改良や人々の福祉にかかわる態度によく似ている。¹²

先に述べたように、19世紀イギリスはいわば若者の社会だった。若いギッシングは苦労を重ねながら、若者らしい活力と自信をもって創作をした。『無階級の人々』は、ロンドンの貧民街とそこに生きる人々の不幸な状況を見据えて鮮やかに描いた貴重な作品である。

註

テキストは George Gissing, *The Unclassed*, edited with an introduction by Jacob Korg. (Brighton: Harvester, 1976) を使用した。

1 長島伸一、『大英帝国』（講談社現代新書、1989）50。

2 『無階級の人々』と『イザベル・クラレンドン』をギッシングから贈呈されたとき、1886年7月1日付けの礼状でハーディは「私以上に御作を評価するのは誰もいないと思います」と述べている。*The Collected Letters of Thomas Hardy*, ed. Richard Little Purdy and Michael Millgate, vol. 1 (Oxford: Clarendon, 1978) 149.

3 フロラ・トリスタン、『ロンドン散策』小林隆芳・浜本正文共訳（法政大学出

第3章 『無階級の人々』

版局, 1987) 118.

- 4 クリストファー・ヒバート, 『ロンドン—ある都市の伝記』横山徳爾訳(朝日選書, 1997) 342.
- 5 ピエール・クースティアス, 「第1章: 社会的・社会文化的背景」, 『十九世紀のイギリス小説』小池滋訳(南雲堂, 1986) 37.
- 6 光永雅明, 「人類教とジェントルマン」, 『周縁からのまなざし』(山川出版社, 2000) 80, 96-97.
- 7 W・J・リーダー, 『英国生活物語』小林司他訳(晶文社, 1983) 98.
- 8 トリスタン 183.
- 9 松浦京子, 「イースト・エンドと東欧ユダヤ移民」, 『周縁からのまなざし』 47.
- 10 Alan Palmer, *The East End: Four Centuries of London Life* (London: John Murry, 2000) 80; L・C・B・シーマン, 『ヴィクトリア時代のロンドン』社本時子他訳(創元社, 1987) 42-43.
- 11 Kate Merriweather, *Understanding Great Britain through Social Class* (Tokyo: Kinseido, 1988) 12.
- 12 Gillian Darley, *Octavia Hill* (London: Constable, 1990) 93, 97, 123.

(倉持晴美)